

デュリュフレ作曲「レクイエム」 オリジナル版で初演

東京合唱団・学習院合唱団公演

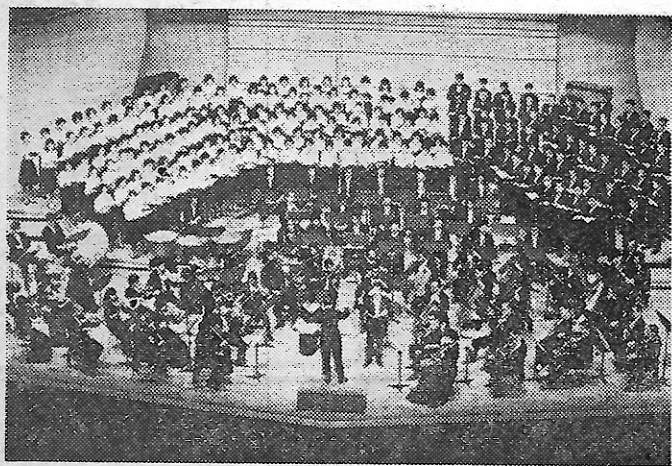
東京合唱団・学習院合唱団合同による第二十五回定期演奏会(指揮前田幸市郎)が、さる十一月二十八日(火)夜、東京文化会館大ホールでひらかれ、モリス・デュリュフレの「独唱・合唱・管弦楽とオルガンのためのレクイエム」作品九一が本邦初演された。

この合同合唱団は昭和二十七年に同じ指揮者でハイテン「四季」全四十四曲を演奏して以来、ヨ一ゼフ・マルクス朝の歌、「ブルックナー」二「ミサ」、ドボルザーク「鎮魂ミサ曲」の本邦初演をはじめ、かすかすの宗教大曲を演奏したといつ、輝やかない伝統をもっている。

当夜は、まずアルベル・ルーセル「交響曲第三番」を前田の指揮、ABC交響楽団で演奏し、つづいてデュリュフレの「レクイエム」の演奏にいらした。この作品は約二十年前に作曲され、フォーレ以後の最高のレクイエムと称されているもので、管弦楽付の総譜による演奏はフランス以外では、ドイツとアメリカで各一回演奏されたにすぎない。曲は全九章から

なっており、フランスのソレム唱法によるグレゴリオ聖歌を素材にして、一つの新鮮しかも独創的なレクイエムに作り上げられている。

約二百名の合唱団(混声)、メ



デュリュフレの「ミサ」の演奏風景

ゾ・ソプラノ中村啓子、バリトン若野靖夫、オルガン(島田豊子)ABC響が一体となって、デュリュフレのレクイエムが奏でられた。声楽部のグレゴリオ聖歌にみられる完成された美、あたらしい

感覚の管弦楽部がみごとに融和され、きくものもともに、同じ世界にぞこい、成功裡に日本での初演を終えた。

しかし男声合唱とメゾ・ソプラノ独唱の一部で、グレゴリオ聖歌のオリジナル美を失したところはあったが、アマチュア合唱団による演奏としては上々の出来といえよう。